

2. 歴史学と歴史教育の歴史(1) —史学史のなかの歴史教育

2025.10.10. 大橋 幸泰

はじめに

学問の社会的責務／研究成果の社会還元／教育がその重要な場のひとつ

→しかし、学問史を振り返ってみると、これまで必ずしも研究と教育がうまく連携してきたとはいえない

→歴史教育を軸に史学史を振り返りつつ、歴史学と歴史教育のあるべき関係を考える

*本日は、19C 後～20C 末が対象

1. 近代歴史学黎明期の歴史教科書

明治中期、ヨーロッパ近代歴史学の方法が流入

*レオポルト・フォン・ランケの学統を受け継ぐルードウィッヒ・リースの来日(1887)

→帝国大学に史学科創設／重野安繹・久米邦武など漢学系史家が教授に就任

*重野「史学ニ従事スル者ハ、其心至公至平ナラザルベカラズ」(1889 史学会創立大会講演)／「苟モ史学ニ従事スル者ハ、先ツ其心術ヲ正クセサルヘカラス、若シ其心不公不平ナレハ、……幾多ノ弊害を醸シ、遂ニハ学問ノ目的ヲ達スル能ハスシテ、史学ノ發達ヲ妨クルニ至ルヘシ、故ニ歴史家ハ尤モ心ヲ公平ニシテ、偏見私意ヲ介セサルヲ務ムヘシ」(『史学会雑誌』1、1889年)

→実証主義史学の導入／『太平記』史観への批判

明治初期～近代歴史学発足当初の歴史教科書／天皇賛美の叙述ばかりでない

*たとえば、雄略天皇の振る舞いへの批判的叙述

「性忍酷殺ヲ嗜ミ、諸惨刑皆自ラ臨視シ、或ハ婦胎ヲ刳キ」(『内国史略』1872)

「天皇。刑律ヲ好ミ。法令嚴明ナリ。諸々ノ酷刑。親臨セザルハ無シ。民皆震怖ス」(『日本略史』1875)

→ただし、神代から起筆し、神武以降歴代天皇の事績を順番に叙述するスタイル／『古事記』『日本書紀』『大日本史』にならう

→一時期、文明開化の推進、西洋思想の流入を背景に、神代(神話)を削除(『日本文明史略』1886)／「南北朝」という表現(『高等小学歴史』1891)／そのほか、郷土史の重視、考古学の成果を意識

→1890 代以降再び、神代の復活／ただし、天皇の事績中心主義からの離脱傾向

*国定教科書制度成立以前、天皇中心の叙述ながらも固定化された叙述ではなかった

2. 国家主義による歴史学・歴史教育への介入

初代文部大臣森有礼／学問と教育とは別との見解(1887)

→研究と教育の分断を促す

*教科書発行制度の変遷／教科書検定の開始(1886)から国定教科書へ転換(1903)

以後、三事件を契機に歴史教育の国家介入が段階的に強化・徹底

a. 久米邦武事件

「神道ハ祭天の古俗」(『史学会雑誌』23-25号、1891)

*神道の排他的優越性に対する批判

→神道・国学派からの攻撃／宮内省・内務省・文部省へ久米罷免を進言

→久米、帝国大学教授免職、論文掲載誌発禁処分(1892)

b.南北朝正閏論事件

国定教科書(『小学日本歴史』[1903]、『尋常小学日本歴史』[09改訂])／南北兩朝併立説

→大逆事件(1910)を契機に、政府に寄り添う教育関係者・新聞・代議士により「国体」「国民道徳」の観点から好ましくない、との攻撃

→桂太郎内閣、教科書編修官喜田貞吉を休職処分、教科書改訂を命令(1911)

→改訂教科書／北朝天皇削除、「南北朝」を「吉野の朝廷」へ

→以後、第二次大戦敗戦まで南朝正統説が歴史教育を支配

c.津田左右吉事件

記紀の史料批判に基づく古代史研究／1920代、戦前の実証主義史学の到達点

→超国家主義者により不敬罪として告発される(1939)

→津田、早稲田大学辞職とともに、『神代史の研究』(1924発刊)、『古事記及日本書紀の研究』(24発刊)、『日本上代史研究』(30発刊)、『上代日本の社会及思想』(33発刊)が出版法違反(「皇室の尊厳冒瀆」の疑い)で発禁処分(1940)

国家主義による歴史学への介入／実証主義歴史学における批判精神の後退

→文部省による『国体の本義』(1937)の作成と配布／文部省による正史『国史概説』上・下(1943)の発行

→皇国史観による教育を徹底／忠君愛国・戦争協力的手段としての歴史教育へ

3. 歴史学と歴史教育との接近と分断

(1) 歴史学と歴史教育との接近への努力

戦後の歴史教育の初心／批判の学として、科学的・客観的歴史研究の成果を反映したものを志向

→歴史学と歴史教育の連携への模索

* 歴史教育者協議会の創設(1949)／会誌『歴史地理教育』の発刊

→歴史学の成果を反映した教育実践の報告

(2) 歴史学と歴史教育との分断を促す政治動向

a. 第一次教科書攻撃(1950代中)

池田-ロバートソン会談(1953)／日米関係の強化のもと、日本の防衛力強化を約束

* 「日本政府は教育および広報によって日本に愛国心と自衛のための自発的精神が成長するような空気を助長することに第一の責任をもつ」

→日本民主党『うれうべき教科書の問題』(1955)／与党による教科書執筆者の思想傾向批判

b. 第二次教科書攻撃(1970代末～80代初)

自由民主党『いま、教科書は…教育正常化への提言』(1980)／森本真章・滝原俊彦(福田信之監修)『疑問だらけの中学教科書』(1981)

→1980・81年度検定強化／「侵略」→「進出」への書き換え報道／伝えられた事例自体は誤報であったが、「侵略」の語を避けるよう指導が強化されたことは事実

→内外から強い反発

・アジア諸国からの反発

・社会科教科書執筆者懇談会の結成／同編『教科書問題とは何か』(1984)

→宮沢喜一官房長官談話(1982)「日本政府及び日本国民は、過去において、わが国の行為が韓国・中国を含むアジアの国々の国民に多大の苦痛と損害を与えたことを深く自覚し、このようなことを二度と繰り返してはならないとの反省と決意の上に立って平和国家としての道を歩んで来た。……(こうした精神は)わが国の学校教育、教科書の検定にあたって、当然、尊重されるべきものである」

→教科書検定基準に近隣諸国条項「近隣のアジア諸国との間の近現代の歴史的事象の扱いに国際理解と国際協調の見地から必要な配慮がなされていること」／以後、近隣アジア諸国の教科書記述についての基本となる

教科書執筆者の対応

- a.教科書執筆拒否による抵抗
- b.教科書検定違憲訴訟提訴／家永三郎(1965～97)、高嶋伸欣(1993～2005)
- c.厳しい制約の中でできるだけ良質な教科書をつくろうとする努力

おわりに

戦前の歴史学／歴史教育との連携に無頓着

→歴史学／教育を通じて忠君愛国思想の拡散や戦争協力に荷担

戦後の歴史学／歴史教育を切り離した戦前の歴史学のあり方を反省

→歴史学の成果をできるだけ歴史教育に反映させようと模索

→二つの問題点

- a.国家主義による分断の策動
- b.研究成果の蓄積による知識偏重傾向

【参考文献】

唐澤富太郎『教科書の歴史』（創文社、1956年）

海後宗臣『歴史教育の歴史』（東京大学出版会、1969年）

鹿野政直『近代日本の民間学』（岩波書店、1983年）

永原慶二『20世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、2003年）

松沢裕作『重野安繹と久米邦武—「正史」を夢みた歴史家』（山川出版社、2012年）

小田中直樹『歴史学のトリセツ—歴史の見方が変わるとき』（筑摩書房、2022年）

千葉功『南北朝正閏問題—歴史をめぐる明治末の政争』（筑摩書房、2023年）

【付記】

- ・明日までに、Waseda Moodleにて講義記録の提出を求める。